

ある友の死を悼む

岡安喜三郎

ある友が亡くなった。職務上は上司と部下の関係であるが、年は近いし、青春時代に同じ職場で働き、共に騒ぎ悩んだ仲間である。織田和一君、一九四九年四月十三日生まれ。結構な年で東大生協に入協し、本郷書籍部（「HB」）に配属になった。文学好きで優しい細身長髪の青年だった。

織田君はその力からすぐに店長になる。書籍部が第二食堂建物に移転した時だったと思う。所沢のこぼし団地の脇に家を買った。何人かで引越し手伝いにいった。一九八三年五月連休中に京都の立命大学生協で常務理事（管理部長）による数億円の横領が発覚した。その再建に、専務であった私は織田君と派遣した。当時立命生協再建の理事長補佐であった京都事業連合専務の長さんから要請を受けて、立命出身だし、酒の場で立命問題が話題になった時に「自分の大学だし、何かしたい」との表明があった（と私が記憶していただけになるのだが、本人は記憶なしのことだった）ので、織田君に頼んだのである。織田君は家族で京都に赴任し、立命館生協書籍部店長として活躍した。赴任で空いた家には東北から

大学生協連に赴任してきたI君が住むことになった。その間に私は全国大学生協連の専務になった。

織田君は京都での役目を果たして一九八六年に東京に戻り、大学生協連の書籍部配属になった。五年程在籍し一九九一年四月に日本生協連（コープ出版）に移籍した。しかし大学生協連在籍の後半は「金曜に酒を飲むと月曜は休む」と何回も繰り返していた。心機一転、新職場での再起を祖った。事態を呑み込んで移籍を引き受けてくれた優しいGさんが、やはり似た行動を起こしてしまった。織田君はコープ出版を退職することになる。

織田君と言えば酒、「HBだから」といって酒ばかりではない仕事もしている」との「名言」は、確か団文の場での文学者織田君の発言だったと記憶している。酔ってホテルの大風呂で六甲おろしを熱唱し、サンフランシスコ市警のパトカーでホテル帰還する豪傑でもあった。

退職後は定職に就くことはなかった様であるが、この二〜三年、アルコールからは離れていたようである。二〇一三年七月逝去。享年六十四歳。

「波羅蜜多心置きなく飲み明かそう」（ほうほう亭）

二〇一三年十月記